

平成 15 年 3 月 27 日

水産庁漁場資源課
独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所

平成 14 年度第 2 回東シナ海漁況海況予報

- 2003 年 9 月までの期間の東シナ海から日本海西部の海域における海況と漁況について、別表の水産関係機関が検討し、独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所がとりまとめた結果 -

今後の見通し(2003 年 9 月までの期間)

海況

- (1) 鹿児島南方海域の黒潮は、「屋久島から屋久島の南での変動」で経過する。
- (2) 九州西方の対馬暖流水は、「東寄り」で経過する。
- (3) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

漁況(来遊量予測)

- (1) マアジ：前年を上回る。
- (2) マサバ：前年並み。
- (3) ゴマサバ：前年を下回る。
- (4) マイワシ：極めて少ない。
- (5) ウルメイワシ：前年並みで平年を下回る。
- (6) カタクチイワシ：前年並みで平年を下回る。

1. 本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/gk14/14gkindex.htm>)に掲載されます。
2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下の通りです。
水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当：竹葉・狭間
住所：〒100-8907 東京都千代田区霞が関 1-2-1
電話：03-3502-8111 (内線 7376) 03-3501-5098 (直通)
ファックス：03-3592-0759
電子メール：toru_hazama@nm.maff.go.jp
水産総合研究センター西海区水産研究所企画連絡室
住所：〒850-0951 長崎市国分町 3-30
電話：095-833-2662 ファックス：095-821-4494
電子メール：kiren@snf.affrc.go.jp
(海況担当：中川倫寿 095-833-2683；漁況担当：檜山義明 095-833-2684)

参加機関

山口県水産研究センター	沖縄県水産試験場
福岡県水産海洋技術センター	(社)漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所
長崎県総合水産試験場	
熊本県水産研究センター	
鹿児島県水産試験場	

平成14年度第2回東シナ海海況予報

1. 今後の見通し(2003年4月～2003年9月)

(1)海流および水系分布

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、前半、後半ともに「屋久島付近～屋久島の南での変動」で経過する。

九州西方における対馬暖流水の分布は、「東偏」で経過する。

(2)表層水温

前半には、山口県沿岸・沖合と対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩 甌沖、黒潮域、沖縄島周辺海域は「平年並み」、薩南沿岸では「平年並み～やや低め」、大陸棚上では「平年並み～やや高め」で経過する。

後半には、山口県沿岸・沖合と壱岐水道、五島西沖、五島灘は「やや高め」、対馬東水道と天草西沖、西薩 甌沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上では「平年並み」で経過する。

2. 経過(2002年10月～2003年3月)

1. 大陸棚上

(1)水系

中国大陸沿岸水は10・11月と2月は「西偏」、12・1月は「東偏」で経過。

(2)海面水温

10月：北部「やや高め」、南部とも「やや高め」。

11月：北部「やや高め」、南部とも「平年並み」。

12月：北部「平年並み」、南部「やや高め」。

1・2月：北部「やや低め」、南部「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1)海流・水系

沖縄北西方の黒潮の流路は、秋季は「やや北偏り」、流量は、秋季は「多め」、冬季は「平年並み」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、10月下旬と2月中旬を除き、概ね「離岸」で経過。

(2)海面水温

10・11月：「やや高め」。

12月：「かなり高め」。

1・2月：「やや高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1)海流・水系

対馬暖流水の分布位置は、10・11月と2月は「東偏」、12・1月は「西偏」で経過。

(2)表層水温

山口県沿岸・沖合：10月は「やや高め」、11月は「平年並み」、1月と3月は「平年並み」、
対馬東水道：10月は「やや高め」、11月は「やや低め」、12～3月は「平年並み」、
壱岐水道：11月は「やや低め」、2月は「平年並み」、
五島西沖：11月と2月は「平年並み」、
五島灘：11月は「やや低め」、2月は「平年並み」、
天草西沖、西薩 甕沖：11月と3月は「やや低め」、
薩南沿岸：11月は「かなり低め」、3月は「平年並み」、
薩南沖合：11月は「平年並み」、3月は「かなり低め」、
沖縄島南東：10・11月は「平年並み」、3月は「かなり低め」、

(3)表層塩分

山口県沿岸・沖合：10・11月は「平年並み」、1月と3月は「やや低め」、
対馬東水道：10月は「平年並み」、11～3月は「やや低め」、
壱岐水道、五島西沖：11月と2月は「平年並み」、
五島灘：11月は「やや高め」、2月は「平年並み」、
天草西沖、西薩 甕沖、薩南沿岸・沖合：11月と3月は「平年並み」、
沖縄島南東：3月は「やや高め」、

3.現況(2003年3月)

(1)大陸棚上

海面水温は北部では「やや低め」、南部では「平年並み」、

(2)黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「離岸」、海面水温は「やや高め」、

(3)対馬暖流域

海面水温は「平年並み」、

(註)引用符「」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり

「はなはだ」：約22年に1回程度の出現確率

「かなり」：約7年に1回程度の出現確率

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し(2003年4月～2003年9月)

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網，定置網，その他

対象魚群：0歳魚(2003年級群(2003年生まれ))，1歳魚(2002年級群)，2歳魚(2001年級群)。

魚の大きさは，あじ・さばは尾叉長，いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年を上回り，沿岸域の漁況は前年を上回り平年を下回る。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が主に，5～15cmの0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と25cm以上の2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並みで，沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(3) 魚体：15～26cmの0・1歳魚(豆銘柄)が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年を下回り，沿岸域の漁況は前年を上回り平年を下回る。

(3) 魚体：沖合域では15～30cmの0・1歳魚(豆・小銘柄)が，沿岸域では35～40cmの2歳魚以上(中・大銘柄)が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：極めて少ない。

(2) 漁期・漁場：まとまった漁場は形成されず，散発的に沿岸域で漁獲される。

(3) 魚体：5～10cmの0歳魚(小・中羽銘柄)が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年並みで平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期後半を主体に，長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は18cm以上の1・2歳魚(大羽銘柄)が，漁期後半は5～15cmの0歳魚(小・中羽銘柄)が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年並みで平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：主に5～7月に沿岸域に漁場ができる。

(3) 魚体：4月は10cm以上の1歳魚(大羽銘柄)主体に0歳魚(シラス・カエリ銘柄)が混じり，5月以降は5～10cmの0歳魚(カエリ～中羽銘柄)が主に漁獲される。

注：「前年」は2002年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。

漁況の経過（2002年10月～2003年1月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

対馬暖流域（東シナ海，九州北・西岸域，日本海）に生息するマアジの資源量は，1970年代後半に低水準にあったが，1980～1990年代前半に増加し，1993～1998年に高水準を維持した後，1999年以降はそれよりやや低い水準にある．それに伴って，対馬暖流域におけるマアジ漁獲量は，1980～1990年代は増加傾向を示し，1993～1998年には約20万トンを維持したが，2000年は15万トン，2001年は13万トンと減少した．

(2) マサバ対馬暖流系群

対馬暖流域に生息するマサバの資源量は，1977～1991年に変動しながら減少を続けた．1992～1996年には資源量は増加傾向にあったが，1997年から減少傾向に転じた．対馬暖流域におけるマサバの漁獲量は，1970年代後半には27～30万トンであったがその後減少し，1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ．1993年以降漁獲量は増加傾向を示し，1996年には40万トンに達したが，1997年には21万トンに大きく減少し，2000年は85千トン，2001年は74千トンと減少傾向は続いている．

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は，1992～1996年に10万トン程度であったが，1997～1999年に増加して23万トンに達した．2000年は17万トンに減少したが，2001年には20万トンに増加し，2001年には高い加入があったとみられる．2000年の漁獲量は46千トン，2001年は64千トンである．

(4) マイワシ対馬暖流系群

近年の対馬暖流域におけるマイワシの漁獲量は，1988年に最大となり，1991年まで100万トン以上を維持してきたものの，それ以後は漁獲量が年々減少している．2000年以後の対馬暖流域での漁獲量は1万トンを下回り，特に2001年以降はほとんど漁獲されない状況にある．1999年に0歳魚を主体に漁況が一時上向いたものの，2000年以降の加入量は極めて少なく，資源を回復させるだけの十分な産卵親魚量がない．そのため，今後資源が急速に増加する可能性は低い．

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

対馬暖流域における近年のウルメイワシの漁獲量は1993年に最大となった後に2000年まで減少し続けた．2001年・2002年と漁獲量はやや上向きではあるが，1990年代前半ほどではない．

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1990年代半ば以後の対馬暖流域におけるカタクチイワシの漁獲量は，1995・1996年と1998～2000年が高水準であった．2001年の夏季までは，沿岸域を中心に好漁が続いていたものの，2001年秋季以降は加入が悪い状態が続いている．2002年秋季発生群も低い水準ではあるが，2001年よりはやや上向

いた。

2. 漁況の経過

2002年10月～2003年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西沖および東シナ海中・南部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計8万7千トンで前年(2001年10～2002年1月)の8万5千トンと同程度であった。マアジは1万7千トンと前年(7千トン)を上回り、さば類は5万6千トンで前年(6万3千トン)を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁況は前年をやや上回る海域が多かった。漁獲の主体は、15～20cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、福岡県・熊本県で前年を上回ったが、そのほかでは前年を下回った。漁獲の主体は26cm以下の0・1歳魚であった。ゴマサバは前年を下回った。漁期前半には0歳魚とみられる27～30cmの豆・小銘柄が、1月下旬以降は大銘柄(35cm以上)が主に漁獲された。マイワシはほとんど漁獲されなかった。漁獲の主体は15cm程度の0歳魚であった。ウルメイワシは南部海域では前年を上回ったが、北部海域では前年と同程度かやや下回った。漁獲の主体は15～22cmの0・1歳魚であった。カタクチイワシは漁期後半に1歳魚主体に多く漁獲された。10～11月は3～10cm程度の2002年秋生まれ群が、2・3月は14cm程度の1歳魚が主に漁獲された。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。年級群の豊度により2歳魚以上の占める割合が高くなるが、全体的な傾向は変わらないと考えられる。2001年級群は2000年級群より豊度が高く、2歳魚の漁況は前年を上回ることが予想される。2002年級群の豊度は2001年級群よりやや低いもののかなりの分布量があり、1歳魚の漁況も海域によっては前年を上回ると予想される。2003年級群について、親魚量の水準は比較的高く、2003年2～3月に行った調査で前年と同様に東シナ海南部海域に多量の仔稚魚分布が見られた。今後の海況によって豊度が大きく変化する可能性も高いが、前年と同程度の豊度と見積もるのが妥当であろう。これらから、全体の来遊量は前年をやや上回ると考えられる。

(2) マサバ

例年、4～9月期には0・1歳魚(豆銘柄)が漁獲の主体となる。マサバの漁獲量の大部分を占める大中型まき網による漁獲量は、10～2月には低調であった前年を若干上回った。10～2月に漁獲された2002年級群とみられる豆銘柄の漁獲量は前年並みで、2002年級群の豊度は2001年級群と同程度とみられる。2003年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2002年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、来遊量は前年並みと考えられるが、これまでの漁況から、沿岸域の分布はやや少なく、漁況が低調に推移する海域が多いとみられる。

(3) ゴマサバ

例年、4～9月期には0・1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体となる。大中型まき網では10月に2002

年級群とみられる豆銘柄の漁獲がまとまったが、その後続けて漁獲されていないことから、2002年級群は2001年級群よりも豊度が低いとみられる。2003年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2002年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、来遊量は前年を下回ると考えられるが、沿岸域では2歳魚以上の大銘柄を主体に1月下旬以降漁獲がまとまっており、4月も引き続き大・中銘柄の漁獲が期待できるため、低調だった前年を上回るものとみられる。

(4) マイワシ

資源は極めて低位であり、資源が増加するための産卵親魚量は十分ではない。2002年の加入量も極めて少なく、2003年級群も期待できない。このように資源が低位である現在では、まとまった漁場は形成されず、沿岸域で散発的に漁獲されるにとどまると考えられる。

(5) ウルメイワシ

2001・2002年の加入量は、悪かった1999・2000年級群と比較して多かった。今後、4～9月期は漁期前半に1・2歳魚が産卵のため九州西岸へ来遊し、漁期後半には0歳魚が沿岸域で漁獲される。1999・2000年に比べて産卵親魚量が多いと判断されるが、1990年代前半ほど多くはない。漁場は、例年長崎県以南の海域で形成されることが多い。

(6) カタクチイワシ

2003年冬季に山陰を中心に大羽の漁模様がよかったものの、九州沿岸の漁獲量は低位であった。資源は低位ながらも、2002年秋季発生群の加入は前年よりもやや上向いている。今後、4～9月期は、山口県沖合から九州沿岸海域において北から産卵親魚が現れて産卵するため、4月は大羽銘柄とシラス・カエリ銘柄が混在する。5月以降は、カエリ～中羽銘柄が主体となる。

表1. 沿岸域の漁況経過（2002年10～2003年1月、一部2月含む。主要港調べ）

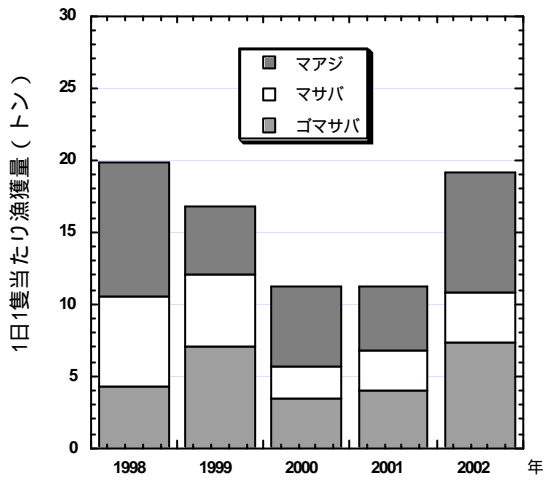
	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網での水揚量は前年比132.0%、平年比112.6%であった。棒受、すくい網では、マアジ当歳魚（ゼンゴ）が10月に水揚げされており、前年比8.0%、平年比8.9%と低調に推移した。	中型まき網では前年比90.2%、平年比121.4%であった。棒受・すくい網ではギリサバが9割を占めて前年比55.5%、平年比109.7%であった。	
福岡	前年・平年に比べ好漁、代表港まき網漁獲量は382トンで平年の1.5倍。銘柄は大、中が主体。同じく棒受網は138トンで平年の1.4倍であった。銘柄はゼンゴが主体。12月にかけて漁獲量が増加した。	代表港まき網の漁獲量は65トン。平年の1.5倍、前年の5.6倍と多かった。まき網、棒受網とも9月までは中銘柄が主体だったが、10月以降マメ・ローソク等の銘柄が主体となった。	低調である。ほとんど漁獲されなかった。

佐賀	漁獲量は前年同期, 平年同期並であった。 前年同期 101.2% 平年同期 101.6%	漁獲量は前年同期, 平年同期を大きく下回った。 前年同期 12.8% 平年同期 18.6%	
長崎	前年を上回り平年を下回った。代表魚市では, 前年比107%, 前年比70%であった。	地域による差があるが, 概ね前年・平年を下回った。代表魚市では前年比55%, 前年比60%であった。	
熊本 牛深港	水揚量が 71.7 トンで前年比22.8%, 前年比248.7%であった。	水揚量は 223.7 トンで前年比103.1%, 前年比135.6%であった。	
鹿児島	期間中, アジ仔・豆アジ(2002年級群)主体に, 10~2月期合計2,005 トンの水揚げで, 前年比161%, 前年比76%。 (定置網8港計) 194トン, 前年比135%		10~12月は小・豆サバ(2002年級群)主体に低調に推移した。1月下旬以降は大主体の水揚げであった。1,067トンの水揚げがあり, 前年比67%, 前年比28%。

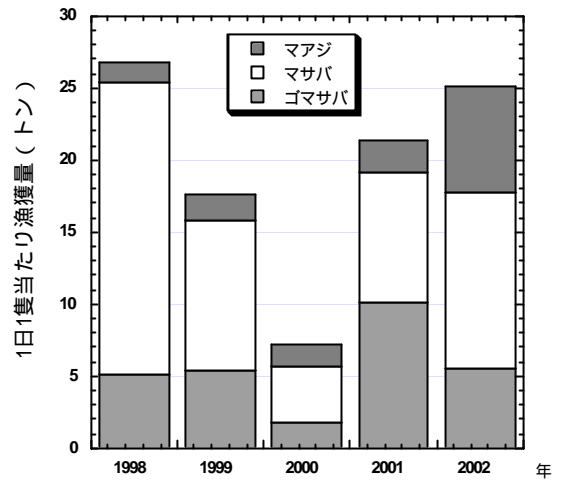
	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	10月に棒受網で中羽・ヒラゴが水揚げされた。水揚量は, 前年比215.5%, 前年比39.7%と低調に推移した。	10月に棒受網で大銘柄が水揚げされた。水揚量は前年比89.1%, 前年比61.8%と前年・平年を下回った。	10~11月に棒受網でシラス・カエリが水揚げされた。水揚量は前年比81.2%, 前年比37.3%と低調であった。
福岡	低調である。ほとんど漁獲されなかった。	代表港まき網の漁獲量は5.3トン。前年の2倍, 前年の22倍と多かった。	代表港まき網の漁獲量は104トン。前年の1.7倍であったが前年の20%と不漁であった。
佐賀	後期の漁獲量は皆無に等しかった(前年同様の漁獲はなし)。 前年同期 - 平年同期 0.5%	漁獲は全く無かった(平成10年以降, 8~3月の漁獲はなし)。 前年同期 - 平年同期 -	前期の漁獲量は前年同期, 平年同様に下回った。 前年同期 69.0% 平年同期 54.9%
長崎	前年同様, 漁獲は低調に推移した。	地域による差があるが, 概ね前年, 平年を上回った。代表魚市では前年比104%, 前年比227%であった。	前年を上回り, 平年を下回った。橘湾地区では前年比179%, 前年比61%であった。
熊本 牛深港	水揚量は0.05トンで前年比1.0%, 前年比138.9%であった。	水揚量は, 337.1トンで前年比239.8%, 前年比122.9%と増加した。	水揚量は, 27.8トンで前年比4.2%であった。 (前年度同期漁獲量は0t)
鹿児島	0.2 トンの水揚げで, 期間中, 漁場は形成されなかった。 前年比20% 前年比0.3%	小羽・中羽ウルメ(2002年級群)主体に742トンの水揚げで, 前年比110%, 前年比51%。	10~1月までは水揚げがなかったが, 2月以降, 大羽(11~14cm)がまとまって水揚げされはじめた。期全体で19トンの水揚げがあり, 前年比-%, 前年比5%。 前年は水揚げなし。

注: 「前年」は2001年10月~2002年1月, 「平年」は過去5年の平均値。

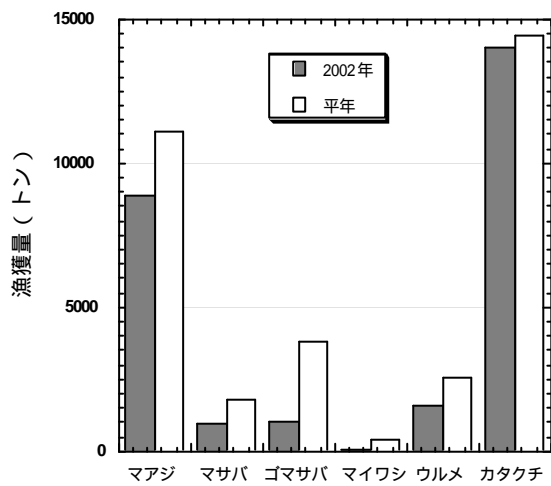
大中型まき網（沖合域）の一日一隻当たり漁獲量（4～9月）



大中型まき網（沖合域）の一日一隻当たり漁獲量（10～1月）



4～9月の沿岸域の漁獲量（山口県～鹿児島県主要港水揚げ）



10～1月の沿岸域の漁獲量（山口県～鹿児島県主要港水揚げ）

